

刀剣乱舞妄想記 「裏切りの審神者」

A0い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は、とある本丸と、とある本丸の刀剣男士たちによる、時空を超えた物語で
す。

ある日、出陣の命が下つた6振。向かつた場所と時代は特別だつた。そんな場所へ向
かつた今剣と岩融はとある記憶を思い出し、他の刀剣男士と刃を混えることになる。そ
れぞれの想いという刀がぶつかる斬り合い。その戦いの末に待つてゐる未来とは……。

未来に残るモノ

目

次

—未来に残るモノ—

紅葉が生える庭は、夕日がそこに落ちたように燃えていた。庭の縁側から見える風景は、その紅葉とその奥に見える煙が上がる炎の海。炎は庭を飲み込む波として近づき、紅葉の色を深めていく。

そんな絶望的状況を本丸の中から、薙刀の切つ先を下げる岩融が見ていた。

「主！敵は本丸のすぐそこまで迫っている！逃げるなら今の内だ！」

「き、君なら勝てるだろう岩融？」

主と呼ばれる彼は、その呼び名が似合わない少年だった。そんな彼よりも幼い今剣は震えてその主に寄り添っている。

「……お願いだ主！頼むから逃げてくれ！」

岩融は今にも泣き崩れそうな顔を主に見せて、拳を宙に振り下ろした。その迫力に主も今剣も身震いして固まつた。

「でも岩融、僕はみんなの歴史を守る為にも、この本丸を離れるわけにはいかない」「だけどもう……」

岩融は唇を噛んで、迫る炎を睨んだ。

「こわいよあるじさま」

「大丈夫だよ今剣」

主が今剣を撫でた時、炎の中から矢が放たれた。矢は炎の雨となり庭を襲う。数十本は彼らがいる部屋まで届きそうだったが、その全ての矢を岩融の一振りが叩き落とした。

「主！ 時間は俺が——」

覚悟を決めたように薙刀を持ち直した岩融は、炎へと突進しようとした。しかし、後ろにいた少年の「岩融！」の一聲で彼の足はピタリと止まつた。

「今剣を連れて遠くへ行つて。とにかく遠くに。僕が死んだら君達は刀剣に戻つてしまふだろうけど——」

「なつ！ 何を言つて！」

「刀剣として生きていれば！ 君達はまだ、生きられる。何百年か刀のままかもしれないけど、生きられる」

大きく開いたままの大男の口は、何も言うことなく閉じた。口を閉じた岩融は頃垂れていた。その巨体は薙刀に支えられて、堪えていた。

「今剣。もしもまた、この世に顕現出来たら今度は正しい歴史を守るんだよ。そして

新しい主のこともね」

「あたらしいあるじさま？」

今剣は少年を見つめたまま、首を傾げた。今剣がその言葉を理解する間さえ敵は与えてくれなかつた。今度は銃声が響いた。炎の中から発射される鉄の塊は紅葉を砕き、庭の岩を砂にし、部屋の襖ふすまを貫通した。標的に当てる気のない、恐怖を与えるだけの射撃。

「行くんだ岩融！」

岩融は何も返事をしなかつた。だが彼の行動に迷いはない。すぐに今剣を抱きかかえ、部屋の奥へと走り出す。

「なにをするんですか岩融！ はなしてください！ どうしてあるじさまはこないんですか？」

今剣が話し終わるよりも早く、岩融はその部屋を後にした。主と呼ばれた少年は、その2人の後ろ姿を最後まで、涙が落ちる目で追つていた。そして2人へ別れ言葉を言った。しかしその声は2回目の銃声に消され、2人に届くことはなかつた。2回目の銃声も周辺の物を破壊して、恐怖を与えるためだけの射撃だつた。

「お前も行つて良いんだよ清光」

少年を見守るようにずっと部屋の隅にいた加州清光は、刀を抜いて少年の前へ立つた。

「でもさ……俺って初期刀じやん？だから最後まで、あなたの側にいるべきだと思うんだよね」

「ごめんよ清光。僕のせいでみんなが……」

少年は顔から感情が溢れ出ていた。言葉を発することもままならない。まるで1人ぼつちになつて震えている彼の手を、加州清光が握つた。

「主がみんなの歴史を守るつて言つた時、あいつもみんなも喜んでた。だから誰も、主を恨んだりしないつて」

感情が混じる声で話そうとする少年の手を離し、加州清光は再び立ち上がる。そして迫る炎を自分の目に焼き付けた。彼は恐怖で体が震えた。それでも刀を胸の前に構えて、敵の方へ向かおうと――

「清光！」

その呼び声に加州清光は恐怖から解放されて、後ろを振り返つた。そこにはやつと話せるようになつた少年がいた。2人は互いを見て、安心したように微笑んだ。

「じゃ、行つてくるね！」

加州清光はためらいなく縁側から降りて、炎へと向かつて行つた。そんな彼を迎えるよう銃声が鳴り、矢が放たれた。一点へ集中させられた銃弾は加州清光の刀を粉碎し、身を守れなくなつた彼の体を一方的に撃ち抜いていく。弾丸が抜けるたびに彼の苦

悶の表情は薄れていき、血が水玉模様を空中に描く。銃弾に踊らされた彼の体は銃声から3秒後、地に倒れた。そして計算されたようなタイミングでそこに全ての矢が降り注ぐ。

「……やす……さだ——」

その矢は彼の命を幾度も貫いた。彼が絶命するとあちこちから岩が投げられて、巨人が踏み潰す如く紅葉の庭を破壊した。そして最後には少年が残っている本丸に徹底的に岩を投げ、叩き潰した。

* * * * *

戦装束姿の刀剣勇士5人が1人を中心に囮んでいる。その格好からか全員の目には自信とやる気がみなぎっている。

「今日も隊長は俺、螢丸。そんで隊員は岩融、国行、清光、安定、今剣。うん、いつも通りだね」

「きょうはどこなんですかー？」

「今日は特別つて言つてたよ」

「遠くなればええけどな〜」

「お前はいつもそう言つているな！」

やる気のない態度の明石国行は、岩融に背中を叩かれた。背中に紅葉がついたわけもないのに、彼はジャンプを繰り返して大げさに痛がっている。

「螢丸隊長。その特別な場所つて言うのはどこなの？」

「ううんと……これ、なんて読むの安定」

「安芸の宮島。だよね清光？」

螢丸が持つている紙を覗き込むなり、加州清光は即答する。

「そうだよ。宮島つて言うと厳島の戦いとか長州征討とかだね」

「確か太平洋戦争では、軍の重要な拠点になつていたはずやで」

すっかり背中の痛みを忘れた明石国行が、そう付け加えた。何に反応したのか、面倒くさがりな彼とは思えないあまりにも素早い対応だった。

「でもぼくたちがいくじだいは、いちねんまえみたいですよ!?」

「んなアホな！ いくらなんでも最近すぎるやろ」

上下にずれた明石国行の眼鏡が、彼の驚き様を示していた。しかし彼だけが驚いたわけではなく、加州清光や岩融も声を出せないほど驚いていた。唯一冷静だつたのは螢丸。

「アホじゃないよ国行。本当だよ。だから特別なんじゃない？ ほら、大阪城とか！ た

まにあるじゃん？」

「1年前？それってちょうど俺が初期刀として、ここに来た時だ」

「その後にすぐ僕が来たんだよね！清光嬉しそうだつたから、僕今でも覚えてるよ！」
「あーもう！うるさいうるさい！出撃するんだから、そういう話はやめてよね！」

大和守安定は両手を使つて、自分の記憶の良さと共に、当時の自分の嬉しさもアピールしていた。加州清光が途中で止めなければいつまでも、当時のことを話し続けただろう。

「ふん！時代がいつにせよ、我らが倒すべき敵に違ひはない！」

岩融が自身の背丈はあろうかという薙刀を地に突き立てた。それにより全員の気持ちと表情が、一気に引き締まつた。おそらくいつもこうして、士気を高めているのだろう。

「そうだね。それじゃあそろそろ、行きますかつと」

* * * *

砂利道の両側には田園風景がどこまでも続いている。空の下では連なる山々が陽を浴びており、のどかな雰囲気が漂う。

螢丸は自身が背負う刀を握り、カチッと金属音を鳴らした。その小さな音でさえこの場では存在感を強め、場の空気を一変させる。

「へへへ。さて、敵はどうかな～」

「そんな張り切らんと螢丸。偵察の今剣たちはまだ帰つてこんのやから、休もうや」
刀を途中まで抜いていた螢丸の手に、明石国行はそつと手を添えた。そのままその手
を押して大きな刀を、鞘の中に納めさせた。

「あ、帰つて來た！」

「んなアホな！早すぎるやろ！つてなんや、今剣だけかいな」

今剣は地を蹴つて飛びながら、忍の様に2人の元へやつてきた。

「お帰りー。どうだつた？」

今剣は螢丸に応じず、かがんだまま足元を見ている。何も話さないので螢丸が今剣の
顔を覗き込むと、今剣はさらに顔を下へ向けてから口を開いた。

「てきは、いません、でした」

「えつ？さすがにそれは嘘でしょ？」

「ほんとうです！」

小さかつた今剣の声が、山にこだまする程大きくなつた。会話を拒否するように下
を向いていた顔も、螢丸と明石国行に訴えるように上を向いていた。

「そ、そんなことつてあるのかな？国行はどう――」

螢丸が頼るように、後ろにいた彼の方を振り向こうとした時、螢丸の顔と刃がすれ

違つた。螢丸の目はすぐに通過した刃に移つた。その刃が刃先に捉えていたものを見て、螢丸は疑問の声を漏らしていた。

「本当のこと、言いなはれ」

明石国行は抜いた刀を上から下へ——今剣の目の前に向けていた。刀を向けられた今剣だつたが、何も驚いていない。むしろその刀を睨んでいた。今剣が一步でも動けば、その刀にすぐ追いつかれるであろう。そのくらいの距離で明石国行は刀を止めていた。これが一体どういう意味なのか、螢丸だけが理解できていなかつた。だから螢丸は声を震わせて尋ねた。

「ちよつと国行。何で今剣に刀を向けるの？」

「こいつは、後ろに隠している右手に、短刀を握つてはる。今ここに、敵はおらんと言つたのにな」

明石国行は今剣の手を見るように、向けている刀で螢丸に促した。螢丸が恐る恐る確かめようとすると、今剣は後ろへ一直線に跳んだ。螢丸に意識が向いている明石国行の油断を、完全についた回避。せかつく向けていた太刀も、一瞬でその場から離れた今剣には追いつかなかつた。

「ははつ、ばれてましたか」

「今剣……どうしたの？」

離れているとはい、短刀を向けられた蛍丸は後ずさりした。けれど彼が後ずさりをしたのは、その短刀に恐怖を感じたからではない。蛍丸は自分が信じていた仲間に、そうされたことに悲しみを感じていた。故に、自分の大きな刀をすぐに抜けなかつた。

「あそこにてきはいません。あそこにいるのは、ぼくのあるじまとみんなです！」

「何を言つてゐるの!?」

「ぼく、おもいだしてしまつたんです。ぼくのほんとうのあるじを！」

「あるじ言うのは今のは本丸の人だけやろ？本当の主つてもしかして、源義経のことと言ふどるんか？」

刀を持つたまま、明石国行は蛍丸の前に出た。

「ちがいます。ぼくのほんとうのあるじは、あるじまとまだひとり。れきしにそんざいしないぼくは、あるじまとだけのかたな！」

「つまり今剣はあそこにいるはずの、俺たちの敵を守りたいんだね」

蛍丸は自分の身長と同じほどの大きな刀剣を構えて、明石国行の前に出た。先ほど明石国行がかばつて後ろに下がった蛍丸とは違う、覚悟を決めた蛍丸がそこには立つていた。

「あるじさまをまもるのが、ぼくのやくめです！」

「ねえ今剣。こんなことしても君1人じゃ、俺たち5人を止められないよ」

「ぼくはひとりじゃないですよ。それにそつちこそ、『ごにんじやないですか』

「あかん！ 加州清光と大和守安定が危ない！」

* * * * *

「俺を楽しませろ！」

岩融の声が轟く林の中には、切られたばかりの木々がいくつも転がっていた。大根を輪切りにするように容易く、大男は薙刀を振るい、木を散らす。男の高揚している笑い声が林を走り、前方にいる2人を追いかける。次に斬られるのは木か自分が、それとも隣にいる相棒か。そんな気持ちで2人は鬼から逃げる。

「俺が相手をするから安定は逃げろ！」

「それは嫌だ！なら僕も戦う！」

「お前の刀はさつきヒビが入つただろ！ 岩融は化け物だ！ 追いつかれたら——」

「はつはつはつは！ 俺が」

空中に飛び上がった岩融の空から迫る薙刀が、加州清光の背中に襲いかかる。それを真横で見ていた大和守安定が、それを黙つて見過ごせるはずがなかつた。

「清光危ない！」

「恐ろしいか！」

薙刀は振り下ろされる寸前で、なぜか一步後ろへ引かれた。そのため走つてゐる加州

清光には当たらなかつただろう。が、彼を守ろうと背後に回つた大和守安定の背中は薙刀の餌食になつてしまつた。鮮血せんけつが跳ねた瞬間、岩融は仰天して舌を鳴らした。

大和守安定は悲痛の叫びを上げると、斬られた勢いのままその場に倒れた。浅葱色あさぎいろの布からは赤が湧き出て、刃が通つた線の道が作られていく。加州清光はその大和守安定を見て、足を引きずりながら近づいた。

うつ伏せになる大和守安定の前でしゃがむと、加州清光は彼の頭を自分の膝の上に寝かせた。震えが止まらない赤い爪の手で彼の白い頬に触れて、加州清光は現実を理解した。

「やす……さだ？」

「自らが友の盾になつたか……」

絶好の追撃の好機であるが、岩融は刃についた血を払い、2人と距離を置いた。大和守安定を抱く加州清光のその光景を見て、岩融は目を瞑つた。その表情は遠い昔のことを思い出しているようだつた。

「安定！ 安定！」

加州清光は自分の戦装束や手に血がついても構いなしに、彼の体を自分に抱き寄せる。何度も彼の名を呼び、体を揺らし、手を握つた。

「きよ、みつ……戻つたらさ……この傷…治せるかな」

「ばかやろう！刀も構えないで、なんで、なんで俺のことを！」

加州清光の涙は大和守安定の頬に落ちて、そこを流れる彼の涙と合流した。大和守安定は加州清光の温度を感じると、とても幸せそうに微笑んで、目を閉じた。

「安定？ 安定！ 安定！」

「愛する友との別れは済んだか、加州清光？」

浅葱色をその場に寝かせて彼は自分の上着をかけた。加州清光は拳をついて立ち上がり、刀を抜く。その刀を構えた彼の目は怒りに溢れた深紅色。

「岩融。お前だけは——殺す！」
斬る

* * * * *

「さすが天狗やな。俺の刀が当たらんわ」

「あなたこそ、ぼくについてこれるなんて、すごいですね。いつもねているのに」

短刀と太刀。大きさからして明石国行が今剣を圧倒するかと思いきや、傷を負つていたのはその明石国行だった。

蝶のように舞う今剣が止まつた時に、蜂のように明石国行が刺すが、今剣はそれさえも風のように躰す。そしてそれと同時に跳んで明石国行を斬る。

短刀とはいえ斬られ続けた明石国行の戦装束は、鎌鼬にやられたようにぼろぼろに

なつていた。それでもその攻撃を恐れない明石国行は、太刀で今剣に何度もふりかかる。斧を振りおろしたような威力の一振りは、一度でも当たれば致命傷になるだろう。それを分かつていてるからこそ今剣の表情に余裕はない。簡単そうに攻撃を躱してはいるが、常にギリギリの勝負をしていると感じているだろう。

「能ある鷹は爪を隠す。いや、それは猫やつたかな。どつちでもええけど、自分の実力はわざわざ、見せびらかさなくともええでしよう」

「だから、ほたるまるをあつちにいかせたんですか？」

「?」

唐突なその一言は、数秒完全に今剣の動きを止めていた。動きを止めるためにその一言を呟いたのだと思つたが、明石国行はその場から動かなかつた。動かないどころか彼は刀を鞘に納めた。

「それはな、あいつも——螢丸も思つてるはずや。もしかすると、大和守安定も加州清光もそうかもしけん

「いきなりなんなんですか！」

今剣はいらついた。いきなりそう話し始めた彼に対してもうだつたがそれよりも、納刀した彼に腹が立つっていた。

「なあ今剣。あんたが変えるその歴史の未来に、螢丸はおるか？」

「そんなことはしりません！」

「俺はあいつがこの世に残れるように、今の本丸に来る前まで、何度も歴史を変えようとした。けどそう簡単に変えられるものじゃない」

「……たいへいようせんそう。ですか」

今剣は構えていた短刀を降ろした。

「そうや。別に戦争が起こつても、この国が勝てばええんやけど、それは無理そ�うでな」

「あなたは、なにがいいたいんですか？」

「別に何もない。ただ、やろうと思えば未来を変えられるあんたが、羨ましく思えたんや」

「いつしょにれきしをかえようつて、ぼくをさそわないんですか？」

「けどなう。螢丸は向こうの2人を助けに行つた。それが、俺があんたを斬る理由や」

「そうですか。ざんねんです」
「おおきに」

両者は再び刀を構えてお互いに、正面から迫つた。

* * * * *

「どうしたどうした！ 腕が止まっているぞ 加州清光！」

「くっそ！ 化け物め！」

棒のように軽々と薙刀を振り回す岩融は、容赦ない一撃を加州清光に浴びせ続けた。それを受け続ける刀は今にも折れてしまいそうである。

涙を流し続け、震える手でなんとか刀を握っている彼からはもはや、戦意を感じることは出来ない。怒りの深紅色の目には横たわる友の顔が映っていた。

「そんな構えで俺の一撃を耐えれると思つたか！」

「……助けて安定」

頭上で薙刀を振り回し、勢いをつける岩融。それを見て抵抗するのも諦めて、閉じかけた加州清光の目に、一粒の緑の光が入り込んだ。その後、開きかけた目には、大太刀が映つた。

「じゃーん。必殺技でーす」

力の抜けた声と共にやつてきた大太刀は、岩融がいた場所を一刀両断にした。岩融はその刀を避けていたが、冷や汗を垂らし、目を見開いていた。

岩融が立つていたその場所は隕石でも落ちたのかと疑うほどへこんでいた。それはどう見ても刀が出せる威力ではない。木々を散らす岩融といえど、それを食らっていたら薙刀ごと、粉碎されていたかもしれない。

「螢丸推参！」

大太刀を担いだ螢丸は岩融と加州清光の間に立った。

「やはり……お主だつたか」

「隊長の俺が来たからには、もう大丈夫だよ清光」

螢丸は加州清光に親指を立ててにつこりと微笑んだ。

「螢丸！ どうしてここに！」

「だつて俺は隊長だからね。当然でしょ？」

「——安定が危ないんだ！ だから安定を先に撤退させてくれ！」

「2人で戻つて良いよ」

「でもお前1人じや！」

「なに言つてんのさ、俺一人で楽勝だよ」

螢丸はそう話している最中、一度も岩融の方を見なかつた。言つてしまえば隙だらけだつた。しかし岩融は自分の身を守るように薙刀を構え続ける。

「ありがとう螢丸。戻つたらすぐに援軍を——」

「いらないよ。報告も隊長の俺に任せて良いから」

螢丸は再び親指を立てた。それを見た加州清光は、大和守安定を胸の前で横抱きして、その場から走り去つた。加州清光の顔はとても苦しそうだったがそれでも歯を食いついて、

しばり、腕の中にいる彼の名を呼んで走り続けた。

岩融はその2人を追いかけはしなかつた。螢丸のあの一撃を見た後だつたせいだろうか、螢丸に背を向けることは死を意味すると思ったのかもしれない。「武藏坊弁慶の薙刀であるこの俺の相手がこんな子供一人で十分とは、ずいぶんと舐められたものだな！」

「ちよつと！今、隊長の俺のことバカにしたでしょ！」

「当たり前よ。貴様に俺が負けるわけがない。さつきのは不意打ちだつたが、構えていれば余裕よ」

「へー。それじゃあ、派手に戦いますかつと」

螢丸はそう言うと、刀を地に落とした。

* * * * *

——とある本丸
「ただいまー」

片手を上げて挨拶をした螢丸は、本丸に帰ってきた。その後ろを、ボロボロの戦装束を着た明石国行が肩を叩きながら歩いている。そんな2人を数名の戦装束に着替えた刀剣男女たちが駆け寄つて迎えた。

「螢丸！明石国行！2人とも無事か!?今、三日月たちが援軍に行くところで——」

「もう終わつたよ長谷部」

「なら早く手入れ部屋に！」

「手入れは国行だけで良いよ。俺は報告に行つてくるからさ」

ささつとその場を抜けようとした螢丸に、へし切長谷部は尋ねた。

「おい——岩融と今剣はどうした」

「……あの2人には、螢がとまらなかつたんだよ」

螢丸はいつになく声に力を入れて答えていた。だがその内容からふざけていると、へし切長谷部には思われてしまつた。

「ど、どういうことだ！それでは主に報告が出来ん！」

「だーかーら！俺が今から報告に行くんだつてば！」

螢丸はぷいと顔を振るとそのまま本丸の奥へと向かつた。そんな螢丸の後ろ姿を見ていた鶴丸はあることに気がついた。

「……こりや驚いた」

「どうかしたのか鶴丸」

「ああ、螢丸の戦装束が傷1つ負つていないんだ。明石国行や戦に慣れているあの2人でさえ、重傷で帰つて来たのにな」

「——ほう、確かにそう見えるな。螢でも舞つたか、それとも……」

考え込んだ三日月宗近にはその理由に察しがついたが、すぐに口を閉ざした。

「それとも？」

「ん？ なんだつたかな。はつはつは、忘れてしまつた」

「三日月さん鶴丸さん。お、お着替えの準備が出来ました」

「おお、ありがとう五虎退。行くぞ鶴丸」

* * * *

——螢丸たちが帰還する前

刀を落とした螢丸に岩融は、薙刀を地面に打ち付けて刀を握るように促していた。

「どうした螢丸！ かかってこい！」

「ここにいた敵は全滅。でも、今剣と岩融は戦闘によつて消滅。つていうのはどうかな？」

「何がだ！」

「報告の内容だよ。俺がこう言えば、俺たちは戦わなくて済むでしょ？」

「信用出来ると思うか！ どうせ援軍を連れてくるのだろう！」

「俺は岩融を信じるよ」

螢丸は刀を拾い上げ、背中の鞘に納めて、岩融に背を向けた。

「どうして俺を斬らんのだ！」

「だつて岩融は敵じやないもん」

「だが俺はここにいるお前たちの敵を庇つてている！言つてしまえば俺も時間遡行軍だ！」

「——岩融は守つてゐるんでしょ？ここにある歴史を。じゃあ大丈夫。それは時間を改変しようとする敵じやないよ」

「でも、でも俺は大和守を斬つたんだぞ！」

「だけど重傷で済んだ。きつと本当は斬ろうとしなかつたんでしょ？」

「つ！俺がそんな甘いやつだと思つているのか！」

岩融は地面を踏み、その場から飛び上がつた。宙に上がつた大男は天から叩きつけるよう、薙刀を蛍丸に落と——

「本気の俺は、すげえんだからね」

刹那に抜刀された大太刀は、迫る薙刀を空に向けて弾き飛ばした。岩融の足が地についた時、すでに手元に薙刀は無かつた。岩融の体重を乗せた一撃を受け切つた蛍丸の足は、その場にめり込んでいたが、蛍丸は笑つていた。

「ほらね、岩融は俺を斬らなかつた。足とか狙えば良いのにさ、防ぎやすいように上から來たんじよ？」

「それは言えぬ。なんせ俺と今剣は既に死んでいるからな」

岩融は武器を持たぬまま背を向けてそう答えた。

「——約束するよ岩融。俺、2度とここに出陣しないように説得するよ」

螢丸は落下してきた薙刀を岩融に手渡した。岩融はそれを受け取り、差し出された螢丸の小さな手と握手をした。

「おう。頼む」

* * * * *

——とある本丸

傷の手当てが済んだ明石国行は、前髪をいじりながら、さつきから黙つたままの螢丸に話しかけた。

「嘘の報告は出来たんか?」

「うん。なんとかね」

「だから俺が報告に行く言うたのに」

「良いんだ。決めたのは俺だから」

そう言う螢丸の顔を、明石国行はつまらなそうに見ていた。

「で、それを聞いてあの方は納得したんかいな」

「もう行かないって、約束はしたよ」

「俺たちが行かなくても、政府は行くで。あそこにおる今剣たちの主である、裏切りの審神者を討ちにな」

「岩融と今剣は強いから平気だよ」

「せやな。まともにやりあつてたら、どうなつたことやら」

それぞれの実力を身で知つた2人は自身に満ちた顔で微笑んだ。しかし蛍丸はふと、口元を細めて口に手を当てた。

「ねえ国行。歴史を変えたら、どうしていけないんだろう?」

「うん? それはな——今会いたい人に、会えんくなるからや」

あまりにもしつかりと彼が答えたので、蛍丸はぷつと笑つた。

「らしくないこと言うじやん。でも確かに、国行と国俊に会えなくなるのは嫌だ」

「せやろ? だから今を守るために、過去を守るんや」

でもな、蛍丸。たとえ俺が存在しない未来が待つっていても、お前が存在し続ける未來

を作りたい。お前だけが無事なら、俺はそれでええんや。今なんてな、興味ないんや。せやから、お前が俺といたいなら、そん時が来た時には俺を斬つて、止めてくれ。

「国行! 蛍! 大丈夫か!」

廊下から聞こえた走る足音の正体は部屋に入るなり、無駄に大きな声で2人を呼ん

だ。

「国俊！俺、今ちよど国俊に会いたいって、思つたんだ」

「な、なんだよ急に！」

いきなり螢丸に抱きつかれた愛染国俊は対応に困り、明石国行に目で助けを求めた。

「愛染国俊。螢丸の面倒頼むわ」

「国行はそんなに重傷なのか？」

「ちょっと頑張りすぎたからな」

明石国行はその場に手をついて寝転んで、2人に手を振った。

「じゃあ行こうぜ螢」

「また後でね国行」

「またな」

愛染国俊に手を引かれて部屋を後にした時、明石国行がこちらに背を向けていたことが
螢丸には印象的だった。

「国行。どつか行つたりしないよね？」

「何言つてんだよ」

「なんか今、さようならつて言われた気がして」

「もしそうだとしても、あいつが動くわけないだろ？」

「そ、そうだよね。食べて寝るのが好きだもんね」

「あつ、今日の晩御飯！超豪華らしいぜ！なんでもにつかり青江が海で——」

今日の俺のやつたことがどういう未来になるのかは分からぬ。もしかしたら岩融と今剣にとつて悪い未来がやつてくるのかもしれない。けど俺は、あの2人に今を大事に、幸せに生きて欲しいつて思つた。だつて、人も物も形あるものはいつ壊れたり、なくなつたりするか分からぬから。

もし悲劇が起きてその結果、過去を変えたいつて願うようになつても、俺は今を生きれるようになりたいし、誰かにもそうなつて欲しい。

俺は自分の歴史に悲観してないよ。そりやたまにはなんで俺だけこんな目について、思う時あるけど、俺のことをみんなが覚えてくれてるから、寂しく思つた時はないよ。でも、だからこそ、俺のことは忘れないでね。

—終わり—

翡翠の魂舞う中に 終えた刀剣 地に刺さる

ひとたび魂輝けば 欠けた刃に煌き宿る

舞う翡翠の光は不死の炎 空を斬り裂く螢の群

古の刀 その名は——

「螢丸！推参！」